閏解說

附「三谷原理」

園田眞次郎著

干支九星 閏解説

附 三合原理

園田眞次郎 著

目次

陰遁陽陽及び閏日原理解説に就き

陰陽二遁の解説に就きましては、古來より甚だ不徹底の書類のみ頗る多くして、陰陽二遁の極意たりし、天體上の眞髓に達せし說明を具體的に順說せられし書物は殆んど皆無と言ふも過言ではありません、尤も陰陽二遁を範圍する天體上の原理に至つては頗る廣汎にして一朝一夕に此說明を徹底せしめ以て陰陽二遁の元體を遂すこと能はざるが爲めである、併し乍ら今愛に本館は高等科會員諸君の熱誠なる研究努力の精神に對し、一層其實力の擴充實現を期する爲め陰陽二遁の原理に對し天體的根幹とする方面に向つて徹底的に公明解說するのでありますo偉大なる力を有する陰陽二遁の大運行を爲すべき其根幹なるものが何れに確立してゐるのであるか、亦何を根據として陰陽二遁が行はれるのであるか、其源を究むることが最も必要とするのである。今や二遁の發始せる其源泉も明かに知ることなく亦其根據とする天

體上の原理も知ることなくして、只徒らに根の無き花を信ずるのみであつて其儘自然に委せて將來を推移するに至らば、必らずや早晩斯道の用機能を失ふべきものである、其結果として高等科會員諸君の熱心なる研究努力は一朝にして水泡に歸せしむること無しとせざれば之等を未然に防止し、永遠に九星運用の實を確保せんが爲め、幹枝九星運行上に起る閏日發生の原理を明辨すると共に陰陽二遁の源泉を明解し因つて以て大正館研友會員に敎說したる九星運用の妙理を永遠に存續せしむることを期するのであります。

序説

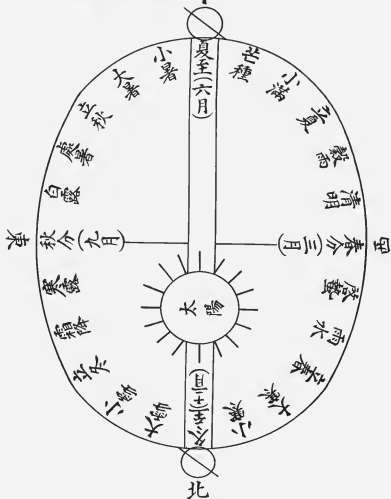
太陽暦上に生ずる二十四時間の閏と亦幹枝九星上に起る六十日間の閏とは何れも皆實地天體上に其源を出發し爰に至つて眞に方道原理の徹底を盡し得たるものと謂ふことが出來る、斯くの如く形無き哲理の靈妙を悟り得るに至りしは三十有餘年間終始一貫の努力を以て、

觀察と實驗と歸納推測の作用に因りし結果である。乍去古來より世上に傳はりたる我易學及び方道學なるものは、極めて知名の學文であるが、其原理とする主要點は槪ね化物的の物にして、眞に具體的原理として信賴するに足るべき根據は頗る不鮮明であつて、之れを具體的に世上へ示すこと能はざる薄弱性であつた然るに今や幸にして眞に其源泉たる所以を明かに示すことを得たるは社會の爲め各位と共に御同慶に堪えざる次第である夫れて今爰に天體上に關したる一切の明說は橫山先生の天文講話に基きたるものにして、本館の研究に非ず唯原理とするに天文を體とし、此作用の全體を易理の用と爲すべき關係上橫山先生の究定せられし、學理の一端を再說して原理の徹底を明辨し以て、高等科諸君の熱誠研究に對して安心より樹へんとする次第であります。尙ほ千言萬語を以て意思の充分盡すべきも紙面に限りあれば餘說に就ては高等科講演の席上に於いて其解說を呈することを約して止筆す。

源泉圖解

左の圓圖は我地球が進行する軌道である夫で圓内の周圍に記入せしは、太陽暦中一ヶ月に二回ある節替りであつて、之れが一ヶ年中に十二ヶ月分二十四節となる、之れを指して一言に節替りと稱す、そして冬至と夏至とに通じてゐる二線は、軌道の南北を明らかに示したのである尚ほ圓外にある⊘は南北共に之れを地球とし、圓の中央にある✹を太陽と假定したのである、それから我地球は毎年十二月冬至の節には冬至と記せし圓外を進行するのである夫れから順次小寒の方へ向へ大寒、立春、雨水と進行して行き西方春分に我地球が至れば、即ち毎年三月となり、此時期を指して例年春の彼岸と稱するのである、更に地球は春分點を通過して、漸次清明、穀雨、立夏と進行して行き、六月廿一日か亦は二十二日に至ると、夏至線南方を通過し夫れより進んで小暑大暑等を通過して九月二十二日若しくは二十三日に至れば東方秋分に至る

原泉圖解

南
夏至(六月)
芒種
小滿
立夏
穀雨
清明
西
春分(三月)
啓蟄
雨水
立春
大寒
小寒
北
冬至(十二月)
大雪
小雪
立冬
霜降
寒露
東
秋分(九月)
白露
處暑
立秋
大暑
小暑
太陽

一ヶ年三百六十五日五時四十八分四十六秒にして一周し終る

のである。其秋分九月を通過して、亦更に寒露、霜降と順次進行して元の北方冬至線に至るのであります。之れで我地球は軌道を一周し終り之れが滿一ケ年と稱して十二ケ月二十四節を一巡するのであります。夫れから亦更に冬至線を地球が出發して、再び前記の通り其軌道を循環し、將來無限に之れを繰り返へして行く、斯くの如き天體作用の循環は、陰陽二遁の源泉となり、亦幹枝九星上に起る閏日六十日間を產み出す基礎となる。

大陰大陽の消長が陰遁陽遁である大法則

は宇宙天體の運行に興り、將來永遠に此作用を繼續して行くのである。每年冬至の節十二月二十一日か、二十二日に至れば日中九時間半となつて、一年中に於て最も日の短かい極に達するのであります。此時期を指して陰の極と稱し、卽ち陰極つて陽を生ずる天地運行の分岐を爲す時期にして、爰に至つて眞に一陽來復と稱するのである。夫れで冬

至の節十二月二十一日か、亦は二十二日より發陽作用を起し、之れより日増しに日中の時間は伸び夏至の節六月二十一日か、亦は二十二日に至つて日中十四時間半となつて往く、之れが一年中にて最も日中の時間の長い極に達する時であります。此時期を指して陽の極と稱し爰に至ると亦陽極つて陰を生ずることになる、之れが極陰發陽の時期を分岐して之れより亦再び冬至の節、日中九時間半となるまで退くのであります。

陽遁順行百八十日間

陽遁順行とは毎年冬至の節に近き甲子の日に一白を中宮に起し、翌日乙丑の日に二黒を中宮に起し、亦其翌日丙寅の日に三碧を中宮に起すのである。此順序に從つて毎日其日の九星を附して六十日間繼續して往けば必らず雨水の節の癸亥の六白中宮の日となるのである。此六十日間を指して陽遁上元と稱す。

雨水の節甲子の日に七赤を中宮に起し、翌日乙丑の日に八白を中宮に起し、亦其翌日丙寅の日に九紫を中宮に起すのである。此順序に従つて毎日其日の九星を付して六十日間継續すれば、穀雨の節に至つて癸亥の三碧中宮の日となる。此六十日間を指して陽遁中元と稱するのである。

穀雨の節甲子の日に四緑を中宮に起し、翌日乙丑の日に五黄を中宮に起し、亦其翌日丙寅の日に六白を中宮に起すのである。此順序に従つて毎日其日の九星を付して六十日間継續して往けば必らず夏至の節に至つて癸亥の日に九紫を中宮に起すのであります。此六十日間を指して陽遁下元と稱することになる。

冬至より夏至の節に至る日數は、百八十日間にして陽遁三元が終る。

陰遁逆行百八十日間

陰遁逆行とは、毎年夏至の節甲子の日に九紫を中宮に起し、翌日乙丑

の日に八白を中宮に起し、其翌日丙寅の日に七赤を中宮に起し、此順序で日々九星を付して往けば、六十日目には處暑に至り癸亥の日に四綠を中宮に起すことになる此六十日間を指して陰遁上元と稱するのである。

處暑の節甲子の日に三碧を中宮に起し、翌日乙丑の日に二黑を中宮に起し、其翌日丙寅の日に一白を中宮に起すのである、此順序に從つて每日九星を付して往けば、六十日目に至つて霜降の節癸亥の日に七赤を中宮に起すことになる、此六十日間を指して陰遁中元と稱することになる。

霜降の節甲子の日に六白を中宮に起し、翌日乙丑の日に五黃を中宮に起し、亦其翌日丙寅の日に四綠を中宮に起すのである、此順序に從つて六十日間每日九星を付して往けば冬至の節に至つて癸亥の日に一白を中宮に起すに至る、此六十日間を以て陰遁下元と稱するのである。之れで陰遁逆行百八十日は終りとなる。

陰遁陽遁合計三百六十日

陰陽二遁の數は、之れを合計して三百六十日となる、是で幹枝と九星の一ヶ年間は終る、併し乍ら、毎年發行する暦日數は、三百六十五日となつてゐる、差すれば陰陽二遁の、幹枝九星上の滿一ヶ年三百六十日に比すれば暦日の方が五日間だけ超過し、陰陽二遁の日數が五日間だけ不足して來る結果が生ずることになる。此場合に於いて直ちに翌年度の幹枝九星を以つて引續き毎日附することになる、然る時は本年中に明年度の幹枝九星を五日間分利用し從つて明年度に至つて亦新たに五日間の不足を生ずることになる、然る時は昨年度の分と本年度の分と合せて十日間の不足を生ずる結果に至る。此順序に因ると六ヶ年間にして既に三十日と云ふ幹枝九星が不足して行くことは止むを得ざる結果にして、突に至つて始めて五ヶ年月、又は六ヶ年目には閏を以つて之れを補ふことになる、之れを補はざれば陽遁中に陰遁が起り、又は陰

遁半ばにして陽遁が起り、其結果として幹枝九星の本義を誤り、實地鑑定に供して一般社會の救濟を果たすことは出來得ぬことになる。

太陽暦の閏は二十四時間

太陽暦の一ケ年は、毎歳三百六十五日閏歳に限り三百六十六日となる夫れで一月、三月、五月、七月、八月、十月、十二月の七ケ月は必らず三十一日と云ふ日數となり四月、六月、九月、十一月の四ケ月は必らず三十日と云ふ日數となり、二月は毎年二十八日にて終るのである。此十二ケ月を累算すると、滿一ケ年にして三百六十五日となる。太陽暦の閏日は二十四時間卽ち一晝夜となつて始めて暦上に現はれることになる。其所以は、暦上の日數一ケ年三百六十五日と眞に天體運行上に起る一ケ年とは、約六時間の差を生ずる事になつてゐる。天體上の運行する眞の一ケ年間とする日數は、三百六十五日五時四十八分四十六秒となつてゐるが、毎年暦上に現はれる日數三百六十五日に比すれば、五時四十八分四

十六秒間丈け、暦日以外の時間を剩餘する結果に至るのである。夫れで、剩餘する五時四十八分四十六秒時間を假りに六時間として、之れを切り上ぐるのである、差すれば毎年六時間と云ふ餘時を生じ、之れが四ヶ年間積る時は、四六二十四時間と云ふ一晝夜の閏日が生れることになる。此一晝夜二十四時間は、必らず二月二十八日と云ふ月に加へて行くことになる。夫れが爲め太陽暦の閏歲には必らず二月は二十九日となる譯であるが、此閏日の有無は幹枝九星上に起るべき閏日には何等の關係はないのである。此の一日の閏日は、冬至と夏至の當日が二十二日に當るべきものが、太陽暦の閏歲には二十一日が冬夏二至の當日となつて、平年より一日早く全く冬夏二至に遭遇すると云ふ差を生ずる結果に至るのであります。

幹枝九星の運用に供する一晝夜

我地球は文字の示す通り一種の土塊であるが、大氣之れを擁ぐと稱

して、地球は空間に浮いてゐる、此地球の住居は宇宙と稱して無限の空間に住居をしてゐる。夫れで、此地球の大きさは云ふと、北極と南極との中央に最も膨脹したる赤道と名付けし所がある、此赤道の周圍は一萬百里としてある、此赤道を二つに斷つた半體の直徑は、三千二百四十七里となる斯くの如き土塊が常に西より東に向つて熄まず自轉してゐる、直徑三千二百四十七里の土塊は二十四時間を以つて一自轉をなし、卽ち之れを一晝夜と稱する所以であるが、之れを精密なる調査に依ると、二十三時間五十六分四秒である。之れが正確なる眞の一晝夜となる。斯くの如き大きな地球が自轉する速力は、赤道に於ては一秒間に一千五百三十一尺の速さである。斯る急速に自轉してゐる地球に生棲する五動物は、皆之れが爲めに精神作用を發揮し活力の基礎を養ふ所以となる、右の如く一晝夜と稱する二十四時間は天體運行に基く一晝夜にして、我が方理上に實用する一晝夜は其時間の區切り點が違ふのであります。天體運行上の一晝夜は我方理上の運用に供する事は出來ぬ、

若し、天體運行上の一晝夜を其儘實用する時は、幹枝九星の運用を誤り眞に鑑定の哲理を失するに至ります。然る故に幹枝九星上の實用する一晝夜は、夜の十二時を境界とし翌日の夜の十二時迄を範圍して用ゆるのである。假りに本日が甲子の四綠中宮の日に當れば、前夜の十二時迄は、癸亥の五黃中宮でありし昨日の分に屬せしめ、十二時一秒より本日の甲子四綠中宮の日となる、其夜の十二時迄が甲子四綠中宮の日に屬する譯になる。卽ち昨夜の正十二時より今夜の正十二時迄の二十四時間を以つて一晝夜と定む、此一晝夜に對して幹枝九星を當嵌め以て之れを五行運用上の一日と定むるのである、只我地球が直徑三千二百四十七里の天體を一回轉する、二十四時間を以つて基準とするは勿論であるが、時間の區切點に相違がある、此點に對して全會員共に留意し、各々方理運用の中心を誤らざらん事を期せられたし。

夏至の節に閏を附するとき

夏至の節に閏を附するときは、夏至の節より手前の甲子の日に一白を中宮に起して陽遁の儘で繼續して行のである。甲子の日に一白を中宮に起して一白二黑三碧と毎日此順に九星を附して行けば手前の甲子一白中宮の日より三十日後の癸已の日に至つて、三碧を中宮に起す順序となる。手前の甲子一白の日より癸已の日に至る三十日間は陽遁に加へることになる此陽遁の終りとする癸已の日は三碧中宮となるが、亦其翌日甲午の日にも三碧を中宮に起して行くことになる。然るときは癸已の日と甲午の日と二日間三碧中宮の日が並ぶことになるが手前の甲子一白の日より癸已の三碧の日まで卽ち前三十日間は陽遁で進行し、癸已の三碧中宮の日の翌日甲午の三碧の日より陰遁に替り行ことになるから翌日の乙未の日には二黑中宮の日となり、亦其翌日丙申の日には一白が中宮に起る順序となる、此儘陰遁に附して行けば甲午の三碧中宮の日より三十日後の癸亥の日は一白中宮の日となるのである。之で最初夏至の節より手前の甲子の日より、癸亥の日の一白

中宮の日まで六十日間を閏の期間内とするのである。夫で閏の終りの癸亥の日は、一白中宮であるが、其翌日の甲子の日は閏期間を始て脱出する日であつて、此甲子の日より九紫を中宮に起し、此甲子九紫の日より始て陰遁上元の第一歩に向へ行くことになり、此甲子九紫中宮の日より向ふ六十日癸亥の日までを陰遁上元とし、癸亥の日の翌日、甲子の日に三碧を中宮に起し、此甲子三碧中宮の日より六十日後の癸亥七赤中宮の日までを陰遁中元とす、亦癸亥七赤中宮の日の翌日は甲子六白中宮の日となつて行く、此甲子六白中宮の日より六十日間後の癸亥の日に一白を中宮に起し此六十日間を陰遁下元とし、之で上中下の三元は終りとなり、癸亥一白中宮の翌日甲子の日に、亦再び一白を中宮に起して、此一白より更に陽遁上元の一歩に進むことになる。

冬至の節に閏を附するとき

冬至の節に閏を附するときは、其冬至の節より手前の甲子の日に、九

紫を中宮に起し、陰遁の儘で繼續して行くのであるが、其甲子の日に九紫を中宮に起して、九紫、八白、七赤と毎日此順序に附して行けば、三十日後の癸己の日に至つて、七赤を中宮に起すべき順序になる、冬至の節より手前の甲子の九紫中宮の日より癸己の七赤中宮の日に至る三十日間は、陰遁に加へるのである。此陰遁の終りとする癸己の七赤中宮の日の、翌日甲午の日にも、亦七赤が中宮に起つて、癸己の日と、甲午の日と、二日間ともに、七赤中宮の日が並ぶことになる、夫で癸己の七赤中宮の日までは陰遁であるが、翌日甲午の七赤中宮より陽遁となるのであるから、甲午の日に七赤を中宮に起し、乙未の日に八白を中宮に起し、丙申の日には九紫を中宮に起すべき順序となる、其翌日の丁酉の日には、一白を中宮に起して行くことになる、夫で甲午の七赤中宮の日より、三十日後の癸亥の日に至つて、九紫を中宮に起すべき順序となる、之で最初の甲子の日の九紫中宮の日より、六十日後の癸亥の九紫中宮の日に至る間の、六十日間を閏の期間内とするのである。閏の最終日である、癸亥の

九紫中宮の日の翌日甲子の日より一白を中宮に起して、陽遁上元に入るのであつて、此甲子一白中宮の日より六十日後の癸亥の日に、八白を中宮に起す、此六十日間を陽遁上元とするのである、夫で癸亥の日に八白を中宮に起して、其翌日甲子の日に七赤を中宮に起し此甲子七赤より六十日後の癸亥に至つて五黄を中宮に起すのである、夫で甲子七赤中宮の日より癸亥の五黄中宮の日に至る六十日間を陽遁中元とするのである、夫から亦癸亥の五黄中宮の日の直ぐ翌日甲子の日に四緑を中宮に起し、此日より六十日後の癸亥の日に九紫を中宮に起す、ことになる、此六十日間を指して陽遁下元とするのである之で陽遁三元百八十日が終り亦夏至の近き甲子九紫の日が直ぐ其翌日となつて之より更に陰遁に向ふのである。

三合原理解説及び運用法

古来より三合五行と稱して、諸書に其圖解及び説明等を示され、各人

之を知ると雖も、其三合五行と稱する其本體なる者が、明說せられたる書物は無いのである、單に子の月には辰が三合となつて之に天道天德月德の吉神在宮するを示したるのみであつて、何故に辰の方へ三吉神在宮するのであるか、其根據とする具體的理由と、其作用を根本的に解說教授するに非らざれば、此三合法たる所以を知ること能はずして、其理如何に靈妙を極むと雖も、之を運用に供して社會人道を益するに至らざれば、結局有名にして其實無き無用の害物となる譯である、單に申子辰の三合たるを知り、亦寅午戌の三合たりを知ると雖も、是を知るのみにして其根據とする所以は如何なる理由に基きて生れ來たる三合であるかと謂ふことを知る必要がある、之と同時に、亦三合原理に基くべき運用法を知ることは、極て緊要なるものである。

本館は今や高等科會員諸君の根本的實力を涵養せんが爲め三合五行に對する古今未發の天躰的原理を詳解し、以て其始源を知らしめ、尙ほ進んで其運用作用を併解して實用に供せしむるのでありますす、

○木は亥より生じ卯に壯んとなつて未に死す、此意味により亥卯未の三支を以て之を一言に三合と稱し亦火は寅より生じ午に壯んとなつて戌に死す故に寅午戌を合せて之を三合と稱するのであるが、此三支の連結を一言に盡せし一つの名稱であつて、此三合なるものが何んの謂はれ有つて生旺墓の理由が起り如何なる根據より此原理が生顯したるかは古來の諸書多しと雖も之を究定したる明說はないのである。協紀辨方書に唯南子これを說くと雖も此三合たる者の始源に對しては何等の根據もなく亦三合法に對して何等運用活法と成る可きものは絕無と云ふ有樣である。爰に至つて多くの書籍中に三合五行云々を語り有るとしても、眞に有名無實となり、單に三合五行と稱する者の存在を證し得るに過ぎざるものと言ふべけれ、而して天道と云ふも、天德と云ふも、或は吉神凶星と云ふも、之等は、人類自身が名付けしもので有つて、其實を示せば天地間に充滿する浩然元氣の消長作用に基くことであつて、他に何等の原理とする所以が有るべきものでは無い、卽ち理

氣の運行が之等一切の根本を成してゐるのである、理氣の運行なるものは天地自ら之を行ふ所以にして之を指して自然力と稱する所以である、自然の力とは人間力以外であつて、天地の自然運行に其源とを發するのである、然る故に今や三合五行と稱するも必ず人造物に非らさる限り其始元は斷じて天地運行の五氣錯交に出ずることは明々白々たるものである。

天體上の三合原理

○三合上の火は寅より生じ午に旺んとなつて戌に死する三合は東西南北、即ち子、午、卯、酉の四正に對する生旺死の消長を主として起るべきものにして、六月七日より七月八日迄は例年午の月である午の月と言ふことは、太陽の直射する光線が南方午の方に來射されると云ふことが原理である、即ち我地球と太陽とが、南北直線の關係となるが爲め太陽の全能力を發揮したる熱と光線は南天より北地に向つて直射して、

來る、此直射を禀くる地上の草木及び五生類は旺んに養はれる、時々刻々に繁茂して其旺盛を極むる、此作用を指して南方午は旺んと稱するのである、而して此旺んなる熱と光線を地球上に送り來ると云ふ理由は、南の太陽より我地球に直射するのであるが、此直射する光線が南方午の方より、百五十度開らきたる戌の方まで斜射して廣がるのである、此光線の擴がりし終末が戌の方であつて、戌の方以上亥の方までは光線の斜射が及んで行けぬのである、直射する午の方の地上より百五十度以上に光線を擴げることは不可能である、光線力は尙ほ澤山あるとしても、我地球の丸き形ちが光線を受くるのであるから百五十度だけ擴がつて、午より戌に達し、百六十度に擴がりし光線は、地球面を外れて、天空に走る結果に至るのである、夫で太陽が正午の方を脫して未の方へ廻ると未の方より百五十度先きの亥の方まで、光線が屆き亥の方が夜の明ける理由となるが、太陽の午の正當に光りを成してゐる時は、必ず其光線は戌の方にて終りとなり、亥の方まで屆かざる關係となる、夫

で午の方より百五十度手前の寅の方は、太陽が午にゐる間は其光りを受くるのであるが、太陽が午の方より一歩進んで未の方へ往くと、寅の方は光線を受くることが出來ぬ譯になり、其結果として、太陽が午を退ぞいて、未の方へ廻れば、戌の方の明るい光線が、亥の方まで明るくなるのである、故に太陽自躰より我地球に發する光線は太陽から地球面の午の正當に直射し其午を直射の中眞として常に左右へ百五十度宛擴がり行くのであるから午の中眞より寅の中眞迄が百五十度とし亦午の中眞より戌の方の中眞までが百五十度とする、午の中眞を起點として左右に廣がることが、何れも百五十度の範圍となつてゐる夫で寅午戌の三支を合せて之を三合と稱する所以である夫で亦太陽が西方酉の方の正當に廻はれば酉の方を旺相とし此酉より百五十度手前の巳の方まで光線は及ぼし次に百五十度向ふの丑の方まで其光線が廣がり行くものである、故に內に太陽が居れば巳酉丑の三支を以て三合と稱するのである、要するに三合とは三支ともに太陽の光線を受ると云

ふ意味であるが、其直射を受くる十二支が旺相と云ふことになり、此旺相を眼目として其光りの終りを受く支と始めを受くる支の三支を一言に盡す言葉が三合と云ふ所以である地球は西より東に向つて一秒時間に一千五百三十一尺の絶大なる早さを以て常に自轉して居るが此自轉する地球より三千八百萬里の遠方にゐる太陽より光線と熱とを送り與へてゐる、地球の自轉に從つて直射する極部が漸次西方へ廻ることになる、午前十一時には已の方を直射し、十二時には午の方を直射し、二時には未の方を直射する、此順序に考案すれば直射する部所が、漸次西方へ廻ると同じく、其直射旺相部所より、右の方の支部は漸次光線を失つて行くが、旺相部所より左りの支部は其光りが增々先へ進行して行くことになる何れにしても、旺相部所より常に百五十度内を照して左右を明るくしてゐるのであります、此旺相部所の、酉の方の時代は八月九日より十一月八日での間、卽ち每年秋の時代とす亦旺相時代が子の方であるときは、每年冬の時代で十一月九日より翌年二月四日

迄の間となる都合である。

○東方の旺相は　二月五日より五月六日迄

○南方旺相は　五月六日より八月八日迄

○西方旺相は　八月九日より十一月八日迄

○北方旺相は　十一月九日より二月四日迄

右一年間四時の旺相と言ふと春は地球と太陽とが東西の關係となり東方の太陽より其光線を受くるのである、夏南方の旺相とは地球が北方に居て南方の太陽より光線を受くるのである、秋西方の旺相は地球が北方にゐて南方の太陽より光線を受くるのである、冬北方の旺相とは地球が南方にゐて北方の太陽より光線を受くるのである、故に元來夏と稱する所以は南方の働らく時期であつて此時期には北方にゐる地球が南方の太陽から天德と云ふ恵みを受けてゐる、夫が爲めに夏と云ふのであります、一言に之を盡せば夏の時代には太陽が南方に在轉してゐると云ふ義理である、之と同じく秋と言ふときは太陽が西に在

轉してゐると云ふ原理である、北方冬と云ふときは太陽が北方にゐると云ふ原理である、春は東方に太陽がゐて地球を照らすと云ふ原理になつてゐる、此理由より春、夏、秋、冬が區別されるのである、何んの謂れもなく、東方西方亦南北等の四正を名けたるものでないのです、夫が爲め三合方とは光線の消方と增進方の二方を含有し其消長の二方と旺相點の三方を範圍してゐるのである、直接太陽と地球の關係に因り發せしものである。

○三合五行とは三合の原則により地球の受る光線が常に消と長との二方の働らきを成し之を陰陽と稱する所以であるが之が行はれるが爲めに五行の運行が伴ふことになる、三合有つて而して後に起るのが五行である、五行あつて三合起るには非らざるべし、三合行はれざれば五行生ぜざるものである、故に三合法なるものは五行の根原を成すべきものである、故に之が運用法に至つて其順序として凡て基礎に用ゆるものであることを知る必要がある、天下の五行とは五ッの作用が

同時期に行はれるので無くして春夏秋冬の四時の順序に從つて順々に起り働らくものであるが三合は終始一貫して一月一日より十二月三十一日迄で熄まずに運行を爲して行くのである、故に三合あつて然る後に五行運行の實作用を生ずる所以である。

○三合五行を如何にして運用するか

三合の生旺墓三局は、萬物の終始と衰滅と旺盛とを以て、常に活動を繼續する天行である。夫が爲め之を基礎として運用する原理は人生心身を擁護する大切なる家相上の一般に、之を運用し人と家とが天地と共に永遠無窮の命運を保持する必要上始て此三合原理を密用するのである、此密法を知らざれば完全なる家相を建設して子孫永遠の無事存續を期すことは出來得ぬものである、故に主として運用する道は家相、地相、上地相、閥相、城相等に運用するものとす、此原理に從つて築くのが家相及び其他一般の常相創作の目的となるのである。

○三合力に缺けたる家は永久性は無い

家相上張り缺けを以て究定する吉凶は必ず明中して其家相に現はれたる如き思想を確立してゐるものである、張出しの吉相となると其家の人に其相が確立して日常働いてゐる缺込の凶相は其凶相通りの實際想が家人に出來上つてゐる、爰に於て良相を創作して住居せば其相の通りの者が其家人の思想となつて活動してゐるのである、故に人家は必ず吉相を求むる必要があるので有ります、故に三合の筋道に張り出し三合の支に三方の張りか力らが在れば其家は必ず繁榮するものである、尙ほ子孫長久の繁榮を保つ力らとなるが、若し三合に張出しの力らか亦は強力を有せざる家相に住居して居れば必ず一代の幸運は保ち得ざるものである、高等科會員諸君は必ず之を確守して三合張りの吉相を求むる事に常に心ろ懸け行くべし、午の方に母家の力らが在れば戌の方と寅の方の二方へ適當なる張り出しを造るのが三合方の張りの吉相となるのである、亦子の方へ母家の力らが存立してゐるときは辰の方と申の方の二方へ張り出しの吉相を作り之に住する人

は繁榮幸福となる赤東方卯の方に母家の力らが在れば亥の方と未の方の二方に張り出しの吉相を造るのであるべし、之が三合張り出しの吉相と云ふ。

張出しの原則として必ず其側の間數より割出して全間數の三分一若しくは三分の一以下の力らを以て充分なる張り出しの力らとすべし、若し三分の一以上に達する時は永年住居する内には必ず家族に不具者を生じ其結果全家族の一生涯の惱みとする原因が作り出されるのである、之と同時に家運も早晩他人の爲めに覆へされる時代が來るのであるから必ず張り出しの力らは三分の一の力以上に及ぼさる事を諒承すべし。

閏歳を測知するには

幹枝九星の閏歳を前知するには甲の子日より癸亥の日に至る六十日間のるも中央に位する癸己の日と甲午の日に注目し甲子日より癸

己の日までが三十日亦甲午より癸亥の日までが三十日である。甲子日より癸己日までの前三十日が冬至の日を越いて手前になれば幾日手前になつても之で閏ふを附せなければならぬ。夫て後三十日の始に位する甲午の日が冬至の日となるとか亦冬至の日より手前に這入れば之で閏ふが起ることになり、要するに後三十日の初日となる甲午の日が冬至の日と一致するが亦は冬至の日より手前に這入るを以て置閏歳であると知れば宜しい。

夏至の節も同じく甲午の日が夏至の當日となるか亦は夏至の當日より手前に這入れば同じく閏ふを附するのであることを知るべし。

此法則たるや冬至夏至に近き甲子の日を以て陽遁上元甲子一白を起し亦陰遁上元甲子九紫を中宮に起する原則によるものである、故に甲子の日が冬至當日に當れば手前の甲子の日は冬至の日より三十一日手前となり冬至後の甲子の日は當日より三十日後となり一日だけ冬至の節に甲子の日が近くなるが爲め三十一日手前の甲子の日を陽

通上元の始とせずして冬至より三十日後に來る甲子の日を以て陽遁上元甲子一白中宮の日と定むることになる爰に至つて前の甲子の日を取らずして後の甲子の日を取り用ゆるが爲め六十日間の閏ふが生ずる原因となる理由である。

十幹五行とは何の効用を爲す可きか

會場に於て常に講說する通り、十二支は質であり十幹は氣である、質とは萬物の實質を指す、十幹とは氣であるが、此氣は宇宙浩然の氣である、陰陽の二氣を指して云ふ、此十幹と云ふ浩然の元氣は、萬物を生成しむる元氣となつてゐる、天地の間に充滿して常に五ッの働らきを實行してゐる、我等が此氣を實用して眞に具體化せんとするには東西南北四方の八幹にして、中央の二幹に運用の妙理は備つてゐないので在る、中央二幹戊己は其まゝにしてゐて、特別の運用法を盡する必要はない、故に五行中の水火木金の四幹を以て實用性の根本を定むるのが十

干運用の法則となるのであります、南は丙丁、西は庚辛、北は壬癸、東甲乙、以上を八干と云ふ此八干を以て運用に供するのである、人の精神とは之を謂ふ、人の精神には他の氣は混入せざるものである、故に丙の年に生れたりとするも、其人が果して丙の精神を常用してゐるかと云ふと必ず然らず、決して其丙の精神全能作用を發揮しては居らぬ、然し乍ら丙の年生れとせば丙の氣分はある、何人が見ても著しく丙のみ發達してゐない、丙丁の南の性を有する人が生れたならば、南方丙の方と東方甲乙の方に張出しが無くば、眞の大智者とか、大學者とか或は名僧とか亦は一方の名人とか群を拔き出でたる智者となる事は出來ぬ、夫が爲めに同じ年月日に生れし男子であつても、智者も有るが、無智者もある、能辯家も有るが、無口も有る亦仕事の出來る人もあるが、出來ぬ人も有る、親孝行の者も出來るが、中には兩親の恩愛を知らぬ馬鹿野郎も澤山あると云ふ譯で、恐らく千差萬別の作用を呈して一定せざる運命所有者ある所以であらふ、總て十干の作用は其人の精神狀態にのみ限つて

良否の別を生ずる、極めて大切なるものである、丙の年に生れたる人をして其丙の眞の精神を充分發揮せしめんとせば、南方丙の方へ張り出しを作るは勿論であるが、更に此丙を生ずる根本である、東方甲乙の方に、適當なる張り出しを作り、東と南に張り出しの力を備へる必要がある、然らざれば必ず丙の精神を充分發顯せしめ群を拔出る大人物を養ふことは出來ない、南方丙丁の二干は人類の頭腦を支配し、亦其創作の重任を帶るのであるから、人生上極めて重要なるものである、頭腦に缺陷を生ぜし者に、如何に學文を仕込み世界中の大學校を卒業せしめても何んの益する所はない學文の數を澤山知るのみであつて、自ら之を運用するの機能が無いとすれば結局無學者に劣るものであつて學文を仕込んで却て本人其者の不幸を招くことになる、家相より備はる頭腦は既に先天性にして、學文の力を以て其頭腦を改造することはできぬ頭腦が主動力となつて學文を運用すると云ふ順序であるから、學力と腦力とは異ふことになる、其結果同じ帝大卒業生でありし同年者が

一人は大臣となつて國務の重任を完全に果し得ることが出來るが他の一人は次官にも及ばずして、小會社の安月給取りとなつて居て、最早や前途に光明を認め得ること能はざる悲境の運命に至つてゐる人が有る、斯の如き著明なる、大名と乞食の如き大差を生ぜし所以が、帝大の教育上より發生したるものであらふか否やと云ふ點に至れば、之に對して何んと答へるか、一方大臣となりしあの人は、頭まが良いから成功するよ、一方小會社に通勤する安月給の人は元來頭が良くないよ、と答へる人が多いが、抑も頭が悪いとか良いとか云ふ其所以は何れに存在してゐるのであらふかと云ふと、頭腦の働らきが、乏しいと云ふ意味である、腦力が少ないと云ふ理由に歸着する、將來乏しき腦力者は先天に其源を發せしもので、後天作用に出づる學文上の關係にあらざることが判明する、故に學文の力らは飽迄學文の力らであるか、先天的の自腦力は又飽迄自腦力であつて、其働きは全然道が違います學文上の力と自腦力とは働らくべき、根本と道筋が異ふ、即ち生れ乍ら自然に有する

所の、自脳質が異ふのである、鉛の如き質を有する自脳が教育の力で銀貨にはならぬ、天の命ずる所以である。生れ乍ら自然的に備はる脳力の本質が、生後變化の無いのは片手の指が五本備はりたると等しく、後天上の作用にて如何んとも成し得ざるものである、斯の如き明白なる理由の確證は列擧するに餘りある次第である、然る故に學文上の關係以外一般修養上の關係以外に天の命じたる性を云ふ、其根本に於て種々なる差が生ずるのであるが、其差を生ぜしむる所以は、十干の力に其原因を發するのである、夫が爲め何れの歳に小兒が生れても、皆頭腦を良性ならしむるには、東西南北の八干に充分の力らを備へ、何れの干に生れし小兒も、皆な充分なる頭腦を養成し得る、力を具備して置かねばならぬ、人生上の自然作用として、生るゝ小兒の賢愚は父母や祖先に其責任は非らざるものであつて、必ず賢愚の差を生ずる根も元理は家相上に因る八干四方の吉凶のみであることを明らかに證することが出來るのである

人力を以て我兒の賢明なるを創作せんとしても出來得ざるは我等の之を知る所にして、論議する餘地なき問題であらふと思ふ、爰に至つて考いて見るならば、人の生るゝや、人間力にあらずして天の命ずる所以てあることが判るのである、天の命ずる作用とは何者を指すかと云ふと、浩然の元氣を屋内に稟け入るゝ作用にして、内外の區切點を境界する家屋の原相に因るのである、家相の原理とする所以は、保氣の大小と其氣の消長を以て定むるのであるが、今爰に述る主要點は單に十幹運用の妙理を說き會員諸氏の鑑定運用に便ぜしむるを目的としたのである、以上の如く十幹本性として當欲める常道は、人類の精神上にのみ關係あるもので有つて身體の大小長短等には何等の關係なきものである、故に十幹は氣にして、十二支は體なる所以である、浩然元氣を住家内に保有する程度と其氣の來去する作用が如何に住者に良否の響きを生せしむるかは頗る深厚にして且大なる所以である、高等科會員諸賢よ、必ず爰に記述したる十幹哲理の解說をして輕卒なる觀念を以

つて一讀に附し、其義理を諒解すること能はざる内に輕視放棄すべからず必ず愼重なる精神を作興し、頻に觸れて之を長ずるの妙用を盡されんことを、本舘は衷心より懇望するのである、數十回念人れに讀み、書意の存在する根本原理を徹底的に理解し得るまで必ず重讀することを誓約する、而して其原理を根本的に理解し何事にも萬用に供することを得るに至らば、爰に至つて始て師の恩に報へる所以となることを諒承して可ならんや、

讀書を形式的に爲し、文章に含有する大切なる意義を我腦裡に得ることなくして、早讀簡單に片付けると云ふ、生意氣性の所有者が現代頗る多く、甚だ自己の愚を他人に示すに等しきものである、會員諸氏に於ては必ず斯る輕卒の態度なき樣、注意し一行の讀書に對しては、必ず一行だけ實効を奏する熟讀を完全にし、自ら其理を解し得るまで繼續しなければならぬ、讀書して終ると同時に本を放り出し、之と同時に讀書せし文意義理等は我腦裡を去つて終ふ、之では讀書せざるも等しき結

果に終るのであるが、此點に理解力のないのが生意氣性と稱する所以である効無き讀書は有害無益となり、忙がしい時間を潰して讀書の勞に嘗て嵌めても、讀覺意義を忘却すれば、無益の時間と無益の勞になることを何より先入せしめられたいのであります。

先天後天解説大意

天の法律に先天と後天の二つがある、先天が在つて然る後に後天が在る先天無くば後天は勿論無い、夫で先天とは何を指すかと云ふと、先きに生れたる萬物の形ちと云ふ意義である、夫で人間の力を用ゑず、天地の力を以て產み成したる者に限り先天と稱する所以が存在する萬物は皆天地が創造し、人間も萬物中の一物であつて一ツの品物である之も天地か創作する、其上更らに天地が養育する、夫から旺んに活動せしむる、最後に至つて、皆人類は天地と云ふ神樣の食物に供せられて仕舞ふのである、之等を知らず生きて人間らしき幅を利かせても最後の

五分間に至れば、必ず天地に食はれて仕舞ふのである、皆人間は天地と云ふ奴の所有品に成つてゐて天地自身の自由自在に左右せられてゐることを知るまい、自分の身體は天地から借用してゐるのが判る筈である、人間の肉體を天地が創造し、此肉體に精神を入れて生き物に造り、毎日々々天地が命令して人間を追ひ使つてゐるのだ、然るに人間其者は、自分で勝手に生れて自分で己れを養育したる如くに考いて、年に達すれば、父母と云ふ天地の意に背いて勝手の行動を執る、父母と云ふ天地が切に止むる所は或は自己の向上發展の機を失すると雖も、必ず己れの希望を斷念して父母の意に從ふべきものである、日本國民の忠孝兩道を尊重しない者は、人にして禽獸にも如からざるものであらふ、忠孝兩道を履むべき原理と其理由を知るまい、人間の作出する物は製造と名づくるが、天地の作出する物は皆創造と名づくるのである、父母あつて我身在る所以を知るのは子と云ふ品物でも自づから判る筈である、父母が日夜心を苦しめ我身を苦しめ、以て其子を養育する父母の心

中を察し得ることが出來得るか、父母の熱烈なる慈愛を我子に對して施す勢力は、實に天地をも覆す力に滿ちてゐるのであることを知れるか、自分の成長したるは、自分が己れを成長せしめたのでは無いことを知つてゐるか、何れの兩親に於いても皆斯くの如き心勞を重ね、長い歲月の間だ我子の養育には切なる艱難を忍ぶのであることを知らねばならぬ、我生兒の病まんことを案じ亦其兒の煩ふことを恐れて、常に無事息災を心中に祈り或は亦其兒の賢明ならんことを願ふて、他日の成功を念じ、實に父母の其子に對するや溢るゝばかりの慈愛の然らしむる所以であらふ、斯くの如き海より深き恩愛の念慮に滿ち、雨に付け風に付け我が愛兒の安らげき成長を願ひ此父母の心中を思ひ察するに至らば、如何にして此洪大なる恩惠に感謝してよいであらふか、永き年月に亘りし父母の心勞に對し、如何にして之を報いるのであらふか、實に實に父母の其子に對する愛の深き且洪大なることは我等人類の等しく之を知る所以であるが、單に之を知るのみでは人間たる資格はな

い、殆んど禽獸と等しきものである。

犬の子でも親の愛を知る、凡そ生ある者は皆兩親の慈愛を知るのである、斯の如き洪大なる恩惠に報いるのと否とで犬と人と違ふのである、此恩に報いるのが人類たる我等の誇りとして、眞に尊とき所以である、夫で親が兒に對して施す愛は、眞に先天的根本心理である、卽ち天の命ずる所以ん亦之を天地の創造と謂ふ、父母の心中に發露する愛情は父母の自發に出ずるが如き感ずるのであるが、之が天の命ずる所にして、人の父母となる者は皆我子を愛するの念に變らない、此念慮が父母の精神に發動せらるゝは、人間が起さんとして起すべき作用にあらずして、天然自然に起り來る靈妙の働らきと言はねばなりません、斯の如き心理が發動し然も眞に其愛を徹底せしめて我子の養育を最後まで爲し遂ぐる父母の慈愛は眞に天地が創造したればこそ行はれるものである、若し天地が之を命ぜざれば社會生物生成して熄まず、と云ふ言葉の必要はないと思ふ、忠孝兩道の根本義も爰に其源を發し仁義の大

道も卽ち是より生じたるものである、斯の如き親子の慈愛が自然の天地運行力に發する所以を指して卽ち之を天の使命と稱する所以である、天の使命に背くことは人類として行ひ得られぬものである、我に對する仇敵の如くに思ふことは我子に對して出來得ざるものである、是が出來得ぬ心理であるから之を先天的と稱して天地の創造であることが判るであらう。

足尾銅山より銅が出る此銅は自然的に地中に生れし物であるが足尾の地中に生れし銅は最初何者が造りしやと尋ねて見ると是は天地と云ふ人が創造したものであつて世上の人間が造りしものでは無い最初地中に生れし銅は自分の父母は天地と云ふ人であつた、天地と云ふ人の造る萬物は皆な之れを創造と稱し此銅塊を仕入れて鍋やヤカンを造るのは創造では無くして之を製造と云ふのである、而して此創造されし品質は先天的にして次に製造されし此作用は、後の天性であるから後天的と云ふ、天地の自然力より生産されたものは、皆先きの天

地で生れし爲めに先天性と稱し、亦先天的に生れし物品を利用して、丈に生れし有形體は皆後天性と謂ふべきである、我等人類が生産せられし四肢五體は先天性にして、何れの人も皆同形であるが、生れて後ちに養育せられ、其養育なるものは後天性である、故に萬人萬別の差あり、人學して知識を買求むるも亦、後天性である、卒業後成功と失敗との區別が生ずるのも、自ら生れし後ちの、天理に支配せらるゝから、之も後天である、或る山中から石材が出る、其石質の硬軟は人間の製造でなく、天地の創造であるが爲め、先きの天性であるから即ち之を先天性と云ふが此石材を以て石碑を造る、亦は石垣とするのは、此石の生れし後ちの藝當であるから、之を後天性と謂ふのである、石の運命も人間の運命も皆な後天性にして、先天性にはあらざるものである、人類の營業は皆後天性であるから、日々月々年毎に其變化が行はれる、珍無類の貧乏生活者が僅かに成功して、大いに威張り散らし、天下の大道も稍々狹きを感ずる程兩腕を振り步るく、亦親讓りの大資產を穴で飛ばし、飛ぶ鳥も落と

す偉大の勢力者が、今は同情に堪えぬ憐れの境遇に悲鳴を發し、大切の一生涯を地獄の道中に終ると云ふ人世の千變萬化は皆後天性に出ずるのである、今は四月の中旬富者も貧者も共に浮れる櫻の陽氣に遭遇し、何んとなく心氣は爽快となつて來た、此櫻の花は何者が造りしやと櫻に向つて放問したら、櫻の時に適當したる天の恵みに養なはれ、今の開花は天地と云ふ父母の創造に生れたのでありります、人間の製造の力らは嫪しも借り得たのではありませんと、大威張りで滿開し泰然として天に聳へて美しき花を人目に示してゐる、之は先天的の力らを發揮した櫻獨特の藝術と謂ふべきものである。

昭和五年四月十五日印刷
昭和五年九月廿六日發行

〔非賣品〕

不許複製

著作兼發行人　東京府下豐多摩郡井荻町上荻窪二丁目
園田眞次郎

發行所　東京府下豐多摩郡井荻町上荻窪二丁目
大正館

印刷所　東京市赤坂區丹後町十五番地
永井印刷所